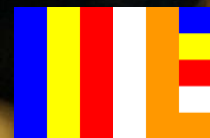


令和 5 年 8 月 8 日

RYUZOKU 第 26 号

南天会



龍
族

RYUZOKU

第 26 号

南天会

令和 5 年

8 月 8 日

佐々井上人来日特集

五月三十日高尾山薬王院 山本秀順御尊師墓参表白

御師匠様、4年ぶりで母山に帰って参りました。もう高尾の山も長くお目にかかれないうちかもしれないとは思っておりますが、命ある限りまた帰って来ることもあるかと思ひます。

タイに派遣されまして、タイで上座仏教の得度を受けまして、3年間タイで修行させていただきました。お師匠様のお陰でございます。続いてご尊師様のご恩に報いず、インドを目指して渡りまして、インドに渡ってこの方55年の歳月を天竺の中央位、南天竜宮城において、そこを拠点として全五天竺を往来して、既に55年の歳月、まだまだ秀嶺の根幹は滅びず、まだまだインド仏教の興隆に向かつて、全身全霊を捧げるつもりでおります。

ご報告申し上げます。55年間の天竺修行においてインド仏教再興は、我自身の身において、完遂したと自負いたしております。今やインド仏教徒は世界のどの仏教徒よりも、どの仏教国の仏教徒よりも強く逞しく、インド仏教は、二度とは滅ばないインド仏教徒に育っております。これひとえにお師匠様の恩恵と、弟子沙門秀嶺心に銘じ肝に銘じております。インド仏教再興完遂せしむるも、なおも精進し、仏恩に報い、師恩に報い奉る心であります。

母国日本ひいては母山高尾山のことは一日として忘れたことはなく、また大僧正秀順御尊師のご恩を忘れたことは一時たりともありません。思えばすでに60年近く前、羽田の空港を飛び立つ時に秀順御尊師また奥様のお二人で羽田空港までお見送りくださいましたことは、秀嶺、背後にいつもお二人が付き添って私を見守って下さっていることを感得致しているものであります。

今回4年ぶりに帰りまして、昨日は成田山新勝寺に参り、鶴見御前

様あるいは橋本御前様このお二方にも多大なるご教訓ご支援をいただいておりますので、お墓に参り、成田山のお坊様方に付き添われて、お墓参りを無事終え、今日は母山高尾山に詣で、こうしてお師匠様にお目にかかれましたことを心から嬉しく思っております。



←こちらから動画がご覧になれます。
佐々井秀嶺資料室フェイスブック

写真…福持英助

表紙写真…長谷川晃一 7月1日龍族会議 四谷真成院

佐々井上人来日2023 全行程

5月28日	日	デリー出発
29日	月	05:35 羽田空港到着 成田山参拝 ワット・パクナム日本別院参拝 四ツ谷真成院宿泊
30日	火	高尾山参拝 山本秀順師墓参 佐藤秀仁貫主面会 仏舎利塔参拝
31日	水	「おとなの週末」「文芸春秋」「文春オンライン」朝日新聞 取材 夜 日本武徳院道場訪問
6月1日	木	成田悠輔氏と対談(YouTube リハックにて公開) Temple Morning Radio 出演
2日	金	練馬さくら病院にて健康診断
3日	土	南天会交流会 東京新聞取材
4日	日	個別面会日 東京新聞取材
5日	月	岡山へ移動
6日	火	姫路 有方家墓参 名古屋山霊苑仏舎利塔 網干龍門寺 河野太通老師面会
7日	水	新見へ 佐々井家土井家墓参
8日	木	別所訪問 旧知の人々と面会 TSC テレビせとうち取材
9日	金	久米南町浄土院・誕生寺 美咲町華蔵寺 岡山帰着
10日	土	長泉寺必生不動明王祈願祭 自由面会 山陽リビングメディア取材
11日	日	養老孟司氏と対談(山陽新聞に対談記事) 万歩書店
12日	月	蒜山へ 蒜山郷土資料館 茅部神社 加茂神社 福王寺宿泊
13日	火	真庭図書館 出雲へ 國美喜書店 神門寺 出雲歴史博物館
14日	水	北島国造館出雲教 出雲大社 稲佐の浜 佐太神社 加賀潜戸遊覧船
15日	木	曾根能夜神社 波迦神社 熊野大社 神魂神社 広島県世羅町へ 松見屋宿泊
16日	金	高宮町佐々部 八千代町佐々井厳島神社 安芸高田市大土山天ノ岩座神社 神石高原町へ
17日	土	終日休息
18日	日	長命密寺本尊御開帳法会参列
19日	月	新見へ RSK 山陽放送密着取材(帰国日まで)
20日	火	高野山 高野山大学講義「なぜ今インド仏教なのか？」 龍光院 親王院 蓮華定院宿泊
21日	水	福井市 八木天摂上人墓参 名古屋へ
22日	木	名古屋市 八事山興正寺名古屋交流会 個別面会 講演
23日	金	豊田市 UNIBO 豊田交流会 講演 京都へ
24日	土	佛教大学講演「若者たちへ佐々井秀嶺師との対話」 佐々井秀嶺デジタルアーカイブ公開
25日	日	仁和寺講演「南天鉄塔考察」
26日	月	個別面会 和田寺タオサンガセンター
27日	火	山梨 内船寺
28日	水	長野県上田市妙光寺講演 中条村「佐々井上人を囲む会」
29日	木	長野市 書肆朝陽館「長野お茶時間」 埼玉県越谷市へ
30日	金	埼玉県松伏町無量寿院 福島県南相馬市同慶寺 東日本大震災慰霊碑 東京へ
7月1日	土	真成院 龍族会議 夜 相模大野 BAIAE 歓迎会
2日	日	雑誌「致知」取材 築地本願寺「佐々井秀嶺東京に立つ”LAST STANDING”」
3日	月	10:15 羽田空港出発
4日	火	デリー着 ナグプール帰着

佐々井上人来日2023

4年ぶりの日本行脚

南天会による佐々井上人来日は2015年から毎年行われてきましたが、2019年の来日以降3年間、日本にお迎えすることが出来ませんでした。その間、2020年にはコロナウィルスの流行により、厳戒態勢のインドの様子が伝えられ、4月に佐々井上人から『遺言』と名付けられたメッセージ映像が届き、9月には、ご自身がコロナウィルスに感染されました。(龍族20号に掲載)翌2021年、22年と南天会のインドツアーも行うことができず、オンラインにて佐々井上人と連絡をとりながらも、来日できない状況が続きました。昨年からようやくインドに行く人も増え、何度か今回の来日を打診しておりましたが、佐々井上人は体調面の不安から、日本行は難しいと言われていました。

しかし本年3月に事務局小林がナグプールに向かい、来日の計画を伝え、ビザの取得や日程の調整などが整っていくと、ご本人も来日を決心されました。

5月29日早朝、お弟子の宮本龍勝師の付き添いにより羽田空港に到着され、

30名ほどの人々が、空港で佐々井上人をお迎えしました。とてもお元気な様子で笑顔を見せられ、一同安心しました。一旦東京の宿所真成院に入り、すぐに成田山の墓参に向かいました。

今回メインの随身者は、昨年ナグプールで得度してお弟子となった小野龍光さんにお預けしました。常に佐々井上人に寄り添い、非常に熱心に随身を勤められ、また車の運転もしていただきました。相棒の高橋浄休さんも途中随身に加わり、三人で日本縦断の大旅行となったようです。

6月3日 南天会交流会

予想を越える150人以上の方にご参加いただき大盛況で終了しました。日本



に来られてから体調もすこぶるよくなり、佐々井上人も会場の熱気に押され1時間以上も熱弁を振られました。後半は佐々井上人にそれぞれ挨拶する時間を設けました、閉会ギリギリまで多くの皆様と接することができ、上人も大変喜ばれていました。

5日から岡山へ。例年の故郷訪問となりました。新見の佐々井家土井家墓参、少年時代の懐かしい場所を訪れ、また支援者関係者を訪問しました。

6月10日 長泉寺必生不動明王祈願祭

佐々井上人がモデルとなっているインド刻の必生不動明王宝前にて般若心経、不動真言100返を唱え、護摩祈願を行いました。その後、長泉寺本堂で自由面会。昼食休憩をはさんで午後4時まで参拝者の皆さんと面談されました。

今回の来日中は、東京、名古屋、京都で個別面会日を設定し、一人一人あるいは



少人数のグループで、佐々井上人と直接お話しする機会を設けました。悩み事や日本人へのメッセージのお願い、旧知の人や、得度希望者など、様々なお話がありました。佐々井上人は真剣に対応され、それぞれ皆さん何か伝わるものがあつたようです。岡山の自由面会でも面と向かい時には頭を叩いてもらい、直接佐々井上人の力強い言葉を受け取る機会となつたと思います。

11日は養老孟司氏と面会(山陽新聞に対談記事)、取材の合間を縫って古書店万歩書店を訪問し、歴史関係の古書を購



入されました。

12日からは、随身の二人と車での行脚となりました。蒜山から出雲、広島へとサイイ部探求の旅です。自らのルーツを辿る旅、古書店や図書館で情報を収集し、実際にその場所へ行ってみる、さらに奥地へと歴史の山谷へ深入する。インドでは不可能な歴史探求フィールドワークです。古代メソポタミアからインド、東アジアを経由して出雲へ、サイイ人の末裔たる佐々井上人が、現代インド仏教の復興を成し遂げるその一代因縁が明らかになる日は来るのでしょうか？

18日、広島は神石高原町の長命密寺（事務局佐伯の寺）にて本尊御開帳法会に参列されました。この法要は、本尊厨子の扉を開いて一切法蔵を誦出する龍猛菩薩



南天鉄塔開頭を再現した次第内容となっています。私事で恐縮ですが、合わせて晋山式（住職として寺に入る式）も行いました。またこの日に合わせて台湾から大蔵

経等約1000冊もの仏典が贈られ、2018年に佐々井上人が台湾を訪問された際にお世話になった黄さん翁さん、花蓮の法要で一緒にした方々も集まり、内容盛りだくさんの一日となりました。

19日から新見―高野山―福井―名古屋―京都と龍光さん運転の車にて各所を回りました。ここから連日講演や交流会が続きます。京都から山梨―長野―埼玉―福島―東京とすべて車で移動し、帰国前日の最終講演まで、走り切りました。高野山大学では、2015年に建立されたアンベードカル博士像を初めて訪れ、「今なぜインド仏教なのか」と題して講義も行われました。アンベードカル博士がいかにしてインド憲法を書き上げ不可触民解放を謳ったのか、時折感情を込めなが



ら話され、何かを成し遂げることの大切さを説かれました。

22日名古屋交流会は、2018年の「ブダガヤ大菩提寺返還に向けて」名古屋集會が行われた八事山興正寺に150人以上の人が集まりました。（詳細は小池文章にて）

23日には豊田市での交流会に登壇。次世代型デジタルハイブリッドアミューズメントフィールドUNIBOという真新しい会場で、映像を映しながらの講演。また濱野剣さんが主宰する日本国際財団が進めるナグプールへの海外インターンシッ



プの説明も行われました。

24日京都、佛教大学講演「若者たちへ」佐々井秀嶺師との対話に登壇。300人を超える来場者と一緒に「ジャイブーム」三唱し、会場は熱気に包まれました。また「佐々井秀嶺デジタルアーカイブ」が、この日ついに公開となり、会場にも手記や写真パネルなどが設置されました。B. R. アンベードカル及びエンゲージド・ブディズム研究会と南天会佐々井秀嶺資料室が協力して進めてきた佐々井上人関係資



料のアーカイブ化事業です。佐々井上人の歴史・思想・教えがこのような形で残されるということは、一つの達成といえるでしょう。

25日 仁和寺講演「南天鉄塔考察」

仁和寺の金堂に描かれた南天鉄塔図を参拝し、大広間で自らの南天鉄塔説を力強くお話しされました。中村龍海さんによる解説も好評で、定員を大幅に超えて立ち見となる人もありました。

翌日は遠藤曉炭師の道場タオサンガセンターをお借りして個別面会が行われました。

京都を出発し、例年訪れている山梨の内船寺、長野上田の妙光寺、中条村を訪問。さらに埼玉を経由して福島県南相馬まで。同慶寺田中徳雲師に面会し、東日本大震災の慰霊碑に読経されました。

5日の岡山到着から30日東京に戻るまでの全行程を、龍光さんの運転する車で踏破しました。随身も務めながらの運

転、本当にお疲れさまでした。

7月1日

龍族会議 佐々井秀嶺上人遺告

身近な人々の間では佐々井上人から龍の法名を授かった人々、得度を受けた人々を「龍族」と呼んでいます。南天会が設立する以前にも沢山の方が名前を授かったと推察されます。また最近特に出家得度希望者が多く、佐々井上人がお元氣なうちに龍族、龍族希望者が一堂に会し佐々井上人への支援の繋がりをさらに深めようと、今回の来日で初めて企画をしました。当初は龍族だけが集まることを想定していましたが、「一度でいいからお目にかかりたい」と多くの方から問い合わせがあり、基本自由参加という形をとりました。結果200人近くの方にご参加いただき、車座になって龍族が集まるような会をイメージしていましたがちよつと趣きの違う講演会のようなものとなりました。お話では今回日本を行脚した際の体験やインスピレーションから出雲民族、大國主命とインドの関係性などから龍族との因縁を説かれ、得度希望者へは厳しい戒律を守り自分を律する覚悟があるものは10月の改宗式典で得度を授けると約束されました。また参加者全員で立ち上がり、龍族としての志を持つようにとインドでの改宗式さながらに三帰

依、パンチシーラを斉唱しました。今回の龍族会議は新しい連帯の始まりです。また南天会と龍族は佐々井上人を支えることにおいて一体であり、ここから支援活動をさらに加速させて行けたらと思います。副題に遺告とありますが、並外れた生命力を今回の来日でも目の当たりにしましたので、あと5年は佐々井上人とともに龍族会議を開催できると個人的には思っています。

夜には相模大野で開催されたB A I A E Japan主催の歓迎会に参加。日本に暮らすインド人仏教徒の皆さんが集い、ナグプールのラームテクにアーリヤナーガールジュナ・エドウケーション・センターを建設するBIGBUDDHAプロジェクトの説明があり、また子供たちの歌や演説、インド料理の御接待がありました。

2日 築地本願寺「佐々井秀嶺東京に立つLAST STANDING」

今回来日の最終講演です。2000席の会場に570名！小野さん高橋さん随身の二人に加え、世界ふしぎ発見のミステリーハンターみほとけさんのトーク、中村龍海さんの遺蹟の説明もあり、そして、佐々井上

人。まさに立ったまま1時間半渾身の演説でした。最後に会場の人々の中に入って拳を挙げて「ジャイビーム！」。かくして4年ぶりの日本行脚は、最高潮の中で大団円を迎えたのでした。

3日、羽田空港からインド帰国。デリー到着後、すぐに国内便に乗り換えてその日の夜には本居ナグプールに到着されました。

写真：高橋淨休 宮本龍門 長谷川晃一



2023バンテージ隨身記

小野龍光

「明日の事など考えるな！すぐ行け！」

2023年、4年ぶりとなるバンテージの来日／日本行脚にて、約一ヶ月に及ぶ隨身という大変貴重な機会です。最も印象に残っているバンテージのお言葉です。

隨身として、目が覚めている時はほぼ常にバンテージの側に居させて頂く身として一貫して実感したのは、バンテージの「今この瞬間、自分が想う相手に、生命を削って生きている」というお姿でした。

時に、直前にお話されていた内容と真逆に聞こえる内容を突如仰ったり、予定していたスケジュールなどに少々無理が生じそうなことを、思いつきのように仰られるバンテージですが、常にブレないのは、その時に頭をよぎり、以前恩を感じた想いある誰かに対し、何としてもその時点にて、その恩に応える行動を起こされようとされること。

「その後のスケジュールが～」など気にしてしまう自分と違い、バンテージは、大切な恩がある方の事を思い出し、それに充分応えられてない自分を見つけるや否

や「今、すぐ、連絡しろ！」「なんとしても行け！」と大きな声で、すぐに行動を起こそうとされる。

まさに、お釈迦様の教えにもある、未だ来ぬ未来をあれこれ考えるのではなく、今この瞬間に集中して、すべきことをし続ける。そして、何よりも、それにより自身の体調への負担など、全く気に介した様子などなく、ひたすら誰かの為にのみ行動を起こそうとされる。

「これこそが、菩薩道というもののだろう」と、バンテージのお姿から何度も何度も実感と共に学びを頂く毎日でありました。

昨年9月、たまたま旅行で訪れたインドにて、縁あって佐々井上人とお会いさせて頂き、出会った翌日にも関わらず「小野君も、将来坊主になれ！」と御言葉を頂き、偶然その2週間後に控えていた大改宗式において、本当に得度を受けさせて頂き「龍光」とお名前を頂くこととなった。そんな、まだボウズになりたての自分が、まさか翌年にバンテージの隨身兼、運転手として、日本行脚5000kmの旅をお供させて頂くとは。

「隨身」というコトバ自体が、初耳で、何をするかは詳しく分からない。

バンテージの身の回りのサポート、お身体ケア、お食事の用意、護身、など…？



長野の限界集落の山奥の集落で、初めましてで案内を頂いた方のお家のお墓にも、しっかりとお経を唱え供養をされるバンテージ

妄想しつつ、色々と先輩の龍族の方にアドバイスをもらい、あとは出たとこ勝負だとスタートしたバンテージの隨身。

「大体の旅程は組んでありますが、バンテージの閃きとかで、随時旅程も変わっていくかと思っています」

南天会の小林三旅さんより頂いたバンテージの日本行脚の旅程「案」は、東京からスタートして、西は広島から、東は東北まで、まさに縦横無尽。

「東京から岡山までの移動は新幹線ですが、それ以降の移動は、車とか電車とかですかね」との事で、旅程も未定のため、交通手段も詳細は固められない。

が、バンテージの負担を考えると、なるべく一台の同じ車で移動してしまえる方

が良いだろうが、レンタカーをずっと借りるとなると金銭的な負担も大きいはず。

たまたま、使っていない嫁の車が都内に置いてあったので「これを使わせてもらおう」とのこと。急遽、東京から岡山まで一人その車を走らせ、岡山に車をひとまず停めてから、その日の夜行バスで東京に戻り、バンテージとの隨身に備えることに。

「般若心経すらまともに誦経できないのは情けなさすぎるから、ついでに般若心経を練習しながら岡山までドライブしよう」と、何百回も般若心経を大声で唱え続けながら運転し、「なんだか安全に参れそうな気がする(笑)」と、結果一石二鳥の機会を頂くこととなりました。

バンテージの故郷の岡山県新見市など、素晴らしい景色を眺めながら運転をさせ

て頂き、「俺は車の移動が一番好きなんだ。新幹線はパアツと通り過ぎちゃうから、景色が楽しめなくて好きじゃないんだ」と仰るバンテージのお言葉に気分よくしていたら「オイ！今回の日本行脚、このまま全部この車で行くぞ！」。

思った事は、ほぼ徹底して実行に移されようとされるバンテージですから、もちろん、結果その通りになりました(笑)。東京から岡山への車の移動を除いても、結果約5000kmほど、バンテージに助手席にお座り頂き、運転手をさせて頂きました。

「オイ！高野山から名古屋までの間に、福井に寄るんだ。大切な場所を旅程に入れ忘れていたんだ。昼夜飛ばしてでも、必ずたどり着け!!いいな!!」

「オイ！今のところへすぐ引き返せ！早くしろ!!」

もちろん、基本「はい！承知しました！」しか答えないのですが、時にお断りさせて頂かざるを得ない時も。

「オイ！もつとスピード落とせ！ゆっくり景色みたいんだ！」

「バンテージ、ここ高速道路です。一車線ですし、後ろからトラックに煽られてます。

ゴメンナサイ(汗)」

そんな、常にどんなお声がかかってても対応できるようにと気を張った毎日の連続においても、バンテージは常に運転手である自分の体調を気遣って頂いているのを実感する。

「道の駅に寄りたいんだ。地図を見て行きたい。」

「ちよつとコピー飲んでいこうか」

インドでも、長距離車で移動している時は常にドライバーが眠そうにしてないか声をかけたり、休憩を入れたりしながら移動するようにしているバンテージを見ていたのだが、本当に常に周りの方々の事を考えていらつしやるのだなあと感動を覚える。

なるべく、バンテージに不自由がなきようにと心配りを意識し続ける日々でも、時に疲れから手落ちがあつたりする時に限り、夜中に「オイ！」と声がかかり「ハイっ！」と飛び起き対応させて頂く。

何か手落ちがあつても、いちいち落ち込んだり、反省に耽つたりなどしてはいられない。自分も、今に集中して、できうる限りのサポートに頭をグルグルさせながらの毎日に「こういうのが、修行というものなのだろうな。有り難いなあ。」と、何故か顔はニヤニヤとしてしまう。

日本行脚中、様々な会場での講演を期待されるバンテージは、基本立つてお話を



「わざわざ俺の好きなぐいびいちごを用意してくれたんだ」と、枝ごとホテルに持ち込んで楽しめるバンテージ。

される。1日10時間ちかく車に乗った後であろうが、時にガラスが震えるほどの大声量で、1時間以上立ちっぱなしで行うこともあるのだ。

講演が終わった後も、挨拶に来る方一人ひとりに漏らさず対応されようとするバンテージだが、隨身として脇にいるからこそ「もうバンテージ、足元フラフラなほどお疲れじゃないか！早くお休みできる場所にお連れせねば！」と感じ、バンテージのお身体にできるだけ無理なきようにと気遣うものの、常に「今」に生きようとされるバンテージはそんな事もお構いなしだ。

ある日のバンテージは、高野山大学で学生達を釘付けにし熱く日本仏教界への警鐘と叱咤激励の、文字通り「獅子吼」の講演を1時間以上された後、アンペードカル

像の前で、たくさんの方々と、山に響き渡るような声量でお経をお供えし、さらにその後、高野山内でも貴重な場所を案内され、「オイ、あの上の場所まで登るぞ」。

「バンテージ、ここ、道も無いですし、もはや崖ですよ。下から見上げてのお参りでもいいんじゃないですか？」

「せっかく案内頂いてるんだ！行くといったら、行くんだ!!腰を押せーっ!!」

と、袈裟姿の僧侶達が慌ててバンテージを追いかける形でみな必死に崖を登り目的地へ。

そこでも、また長くお祈りをささげるバンテージ。

自身の身体やその後のスケジュールなどに囚われず、今日の前に頂いている機会や恩へ、全力でお応えしようとするバンテージの行動原理の象徴のような出来事

でした。

そして、とあるお寺に参った際に、4年前には顔を見せていた恩ある方がお寺に来ていないのに気がついたバンテージ。

「あの方はどうしたんだ？」

聞けば、その御方はお身体もだいぶ弱ってしまつたとのことで、一人でお寺に来るのは難しく、お家にいらつしやるとのこと。「オイ！今すぐ、その方に電話しろ！」

その方に、お電話が繋がると「今すぐそこへ行くから、待つてろ!!」

どうやら、相手の方は、自宅に居ることもあり「散らかっているから」と何度も遠慮されている様子だったのだが、バンテージは意に介さない。

「行くといつたら行くんだ！」

「バンテージ、すでに午後5時ですし、ここから片道1・5時間はかかる場所ですから、先方のお家につくのも遅い時間になると思います。明日もロングドライブになるのでお身体も心配です…」

「明日の事など考えるな！すぐ行け！」お相手が、電話口でしきりに恐縮し、遠慮されているのにも「もう電話を切れ！すぐ向かうんだー！」と、陽が傾き出した山道を、その方のお家に向かうことに。

結果、その御方ともお会いすることができ、その方もバンテージとの再会を大変

喜ばれていらつしやつた。

「また、来年な！」

相手の方は、そう語るバンテージに涙ぐみながらうなずくが、そういう時のバンテージは、いつも颯爽と、振り返らずに別れを告げて去っていく。

未来の事など誰にも分からない。90歳も目の前のバンテージだからこそ、誰よりもそのことを身体で感じていらつしやるのだろう。だからこそ、今この瞬間の時間だけに心を傾けていらつしやるのだろう。

そう、横で感銘を受けながら、大きな声で「ジャイビーム！」とその方とお別れを告げて車を出発し、お家を後にした。

「ほらな？ 会いに行つて正解だったろう。」

電話では（あの方は）断っていたが、本当は俺に会いたかった筈なんだ。体調が悪いと聞いたからこそ、今日無理を押してでも会いに行つたんだ。明日じゃ、どうなっているか分からないんだ。」

夕焼けに染まつた富士山を眺めて子供のよう嬉しそうな顔を見せる助手席のバンテージを眺め、しみりその瞬間のバンテージのお姿を噛み締めるように、山道をドライブさせて頂きお寺に戻らせて頂いた。

バンテージのようなお立場になると、会うことすら恐縮する方はたくさんいらつしやるだろう。ましてや、1時間以上時間

をかけて、家に突然来るなんて、恐縮しない訳がない。でも、バンテージにとつては、恩があるその方が、今会える。そして、相手の体調がよくなる高年齢ならばこそ、明日ではなく、今、行動に移して会いに行かねばならない。

「なるようになる。ならぬものはならぬ」
 ついつい、先のことばかり気にしてしまう自分ですが、バンテージがこう仰る通り、なるようにしかならないもの。縁がなければ、ならぬものはならぬもの。
 ただ、向かう方向さえ、人様の為と違わなければ、今できることに集中して行つていけば、間違いは無いのだろう。

今、という時間にただ集中して生きる、自分の体調など、明日の自分など省みずに、恩ある方が今いるのであれば、ひたすら自分の生命を削つてでも恩を返しに行動をする。

そんな一貫した行動で、多くの学びを与えてくださったバンテージが、この日本行脚を通して一貫して皆さんに発していたメッセージが、「使命」という言葉でした。

「あなた達は、自分の命を使つて、いったいどう生きるのか？」

各地の講演において、常にバンテージが訴えていらつしやつたのが、「使命」 自身の

命をどう使つて生きるのか」という内容でした。

何百人も立ち見で詰めかける講演会場において、普段の音量がだいぶ細くなっているバンテージが「使命」について声を振り絞つて皆さんに問いかける時には、会場中の人たちが静まり返つて、バンテージの姿に視線が集まる。

ステージの横で、常にバンテージのお側に居させて頂ける身だからこそ、会場の皆さんがバンテージからの問いかけに真剣に向き合っている反応がひしひしと伝わり、と同時に、自分自身に対しても、その問いを改めて問いかける。

随身の期間、幾度となく、講演会だけでなく、自分自身に投げかけられた問いでした。



五右衛門風呂を楽しむバンテージ。嬉しそうな時のバンテージの笑顔は、みんなを幸せにする。

随身最後の羽田空港でも、爽やかに颯爽と背中を見せて日本を後にされたバンテージ。

「インドに戻ったら、すぐにブツダガヤ奪還で最高裁に立たなきゃならん」

日本出国時にも、感傷になどこれっぽっちも見せずに、次の闘いの時間へと向かっていくバンテージの後姿を見て、あまりに濃い随身の約一ヶ月という時間だったものの『バンテージと離れた瞬間から、自分もあらたな使命への時間へと集中する今を重ねていこう』そう、すぐに心を入れ替えられるだけの、自分なりの小さな修行を体験できた、貴重な一ヶ月となりました。

「龍光は、龍光の道を存分に行け」

そう、バンテージより有り難いお言葉を頂いたものの、自分は果たして、どのように人様のお役にたてる人間へと、命を使っているのだろうか。

未来は未だ来ていないので分からない。

でも、これまでの、バンテージの様々な言葉や行動が、今後の自分にとって、かけがえのない礎となって、自分なりの道へと進むべく、ひたすら人様の為に、今で言う事を重ねていこう。そう、自身の決意を改めて固める時間を頂けた、約一ヶ月の随身の体験となりました。

昨年10月の得度から、この度のバンテージの随身という有り難い機会を頂き、本当に縁とおもしろく有り難きものだと思います。

大変未熟で知識も経験もない自分のような者が、貴重な機会を頂けた事に、バンテージをはじめ、南天会の皆様に大変感謝しております。

この場を借りて、みなさま、誠に有難うございました。バンテージに少しでも恩返しできるように人間へと、一歩ずつ、今に集中して参りたく存じます。



写真：小野龍光 高橋淨休

随身記

高橋淨休

高橋「明日から長旅ですね。お氣をつけて」
佐々井「お前も来たらいいよ」
高橋「えっ?」

バンテージが岡山に発たれるその前日、お見送りのつもりで四谷真成院にご挨拶に伺ったらいきなりこれ。事前に南天会小林さんより随身の打診は受けてはいましたが、それは京都滞在中、数日程度の話。前フリもなく明日からとは面食らいましたが、脇にいた龍光さんも(行かないの?)的な顔をしているし(バンテージと行く日本行脚の旅、どうしたって楽しいでしょ)と直感が語りかけてきます。というか、まずこのワケの分からなさですに面白。い。「わかりました。予定を調整して明後日から合流します」と突然の流れに飛び込むような形で、約一ヶ月におよぶ随身の旅が始まりました。

すぐに旅支度を済ませ、兵庫より合流。岡山―島根―広島―和歌山―福井―名古屋―京都―東京と回らせて頂いたのですが、古本屋や郷土資料館で歴史資料を探索し、普段だったらまず行くことのない寺社仏閣を巡りつつ、お出迎えしてくださる方々と縁を結んでいくというあり

得ない体験の日々。6月は新緑の季節ということもあり、車窓の向こうに流れる日本の原風景はとても眩しく美しく、地図を片手に寄り道しながら行く三人旅はまるで現代版水戸黄門のようでした。

しかしよくよく考えてみると40歳も年齢が離れた人と寝食をともにしながら一緒に一ヶ月も過ごすなんて、これまでの人生で初めての経験なわけです。家族でももう少し別々にいると思うのですが、この「佐々井秀嶺と日常をともにする」という非日常が、僕の中の日本人的老人像、常識、人生観をいい意味で壊してくれました。随身として一緒に過ごすということはバンテージが今何を考えているのか、今何を求めているのかを、先んじて意識を張り巡らすわけだからそりゃ影響受けないわけがない。腑に落ちない時も質問すれば、いちいち腹落ちする回答が得られ、脳内シナプスに新規ルートが出来上がっていく。この一ヶ月は僕にとってまさしく刺激と成長の旅でした。

そんな中で個人的に眼が開かれた思い出深いエピソードをいくつか紹介したいとおもいます。

88歳、終わらない求道の旅

本(歴史)に対する執着はすごかったです。『バンテージ?』って部屋を開けるとだ

いたし読書してました。図書館や郷土資料館に立ち寄ると生き生きとして、ときには出雲の古書店で歴史書5万円分を一気買い！なにやら佐々井(佐々部)氏と仁徳天皇が伊勢神宮の勧請に係っているらしいのですが、ただの好奇心の範疇を超えている気がします。



『浄』どうしてそこまでしてルーツを知りたいんですか？』

『自分にこういう役目が与えられたのは、おそらく先祖からのなにかがあるはずなんだよ』

『浄』え？バンテージまだ自分の使命探ししてるんですか！(インド仏教最高指導者なの！？)』

『バ』なんとなくはわかってるんだが、もっと確信したいんだよ』

『佐々井秀嶺』の中から『佐々井実』の顔がチラリと垣間見えた瞬間でした。社会から求められる役割としてではなく、個としての使命を探していたのです。なるほど日本帰国時はそれに向き合うことができ

る貴重な機会で、そのヒントを自らの外(ご先祖や神様仏様)に求めているからこそ知識欲なのか、と妙に納得。求道の深淵を垣間見た気がしました。



右に写っているダンボール、一度は梱包された古書群ですが翌朝再び開封されました(笑)

行くと行ったら絶対に行く！

バンテージはとにかく「詰める」人でした。とにかくなんでも納得するまで突き詰める。蒜山に「竜頭」という名前のバス停があり、藪の奥に小さな滝壺があるのですが、車を降りその滝壺を直接見るというのです。行く手には生い茂る藪で道は

なく、足元は泥でぬかるみ不安定でよく滑る。バンテージに何かあっても困りません！『この場所から拝むのも良くないですか？』と龍光さんと何度も静止しましたが、意に介さずどんどん藪の中に入っていきます。我々を振り切って小さな川をジャンプで飛び越えた時はさすがに仰天しましたね。杖をつく88歳がジャンプするって、苦笑いするしかなかったですが、いかにもバンテージらしいエピソードです。



大きな鮭と満面の笑み

バンテージは焼き魚が好きで、コンビニで買い出しする時はいつもメインメニューとして食卓に並べていました。この日は居酒屋で夕食を摂ることになり、メニューから焼き魚を注文したところ、ビッグサイズの一品が焼き上がってきました。「バンテージ、でっかいのきましたよ！」と差し出すと、それを見たバンテージの満面の笑顔！！

こちらまで幸せになって思わず写真を撮ってしまいました(シンプルにコレでいいんだよなあ・こ)と、この笑顔の向こう

にインド生活50年と日本生活50年の間にあるパラレルな時間軸に思いを馳せました。



仏道に命を燃やす、その背中

観衆の前に立つと88歳とは思えぬエネルギーあふれる大演説で誰もが驚かれます。バンテージも人の子。この日はお疲れのあまり立ち寄った道の駅でしばしの仮眠。こういう姿を知ってしまうと、このあと舞台上に立つて闘志を燃え上がらせながら説法をするバンテージが一層の迫力を帯びて見えてきます。88歳の肉体的衰えは我々に想像もつきませんが、そこまでして仏道を歩まれるの



か。とこちらまで奮い立ちますね。
タイムカプセルに乗ってきたやつてきた大和魂

あるとき、相談者のお悩みを「そんなものは迷信だーッ」と一喝したことがありました。日本では檄を飛ばす系のお坊さんってあんまり見ないですよ？バンテージ独特のこの説法スタイルはインドで泥まみれになりながら捨て身で獲得したものに加え、佐々井実の中にある戦前の教育と55年インドで培養された大和魂があわさった言葉だからこそあの熱量なんだと思います。築地本願寺ラストスタンディングで響き渡ったバンテージの『ジャイブーム！』とそれに呼応する来場者たち。拳を突き上げながら胸に沸き起こるワクワクと爽快感。それは閉塞感に覆われた現在の日本人にインドから再び魂の炎を移し替えていくような姿にも見えませんでした。



浄休、お前は加行して坊さんになれ

岡山のホテルで朝食を終え、出発の支度をしているときのことです。バンテージが突然、「浄休、お前の使命は何だ？」と

問いかけてきました。『使命ですか？』とでも重い質問に戸惑いましたが、とっさに「仏教の可能性をもっと掘り起こしたい」「日本とインドの架け橋になっていきたい」と答えました。普段なんとなく思っていたことですが、初めてちゃんと口にしました。バンテージは「わかった。お前は生涯をかけてそれをやれ。」と言いました。それ以降、道中でも折りに触れ「お前はちゃんと修行をして坊さんになれ」と念を押すようになり、自分の中でも決断が固まっていた気がします。

バンテージは顔相占いで行列ができるほどの実力者で、当たりすぎて辞めたらしいですが、だいたいが思っていることを見透かしているような気がしますね。

バンテージは、何と言ってもすべてが規格外でした。社会問題に対する行動力と実行力、他者に対する人間力、88歳でのこの行動力、そして記憶力の良さ。老いに対するイメージも一変しましたし、バンテージを横で見ていると、実際にそれができるんだというリアリティがありました。現代日本に対する忖度のなさや本質を言い切るパンクス精神も含めて、日本人の常識からすると突き抜けすぎて気持ち良さすらありました。

これはある種の快感であり、また希望でもありました。伝記に出てくる戦国武

将のような人物が今ここにいて、会話を交わし触れ合うことができるという奇跡。インドからもたらされたこの闘魂の炎をどのように受け継いでいくのか、大きな宿題をもらったような気がします。



右写真：長谷川晃一
本文写真：高橋浄休

名古屋興正寺での交流会

小池一郎

6月21日の夕方、車で長旅の佐々井バンテージ、随行の小野さん、高橋さんが名古屋に到着しました。高野山から福井県のお墓参りを経て、6県(ー)を移動して来たということでした。大変お疲れの様子で、バンテージはホテルの部屋でそのままお休みになり、翌朝お迎えに行くと、今回の旅で一番よく眠ったとのことでした。22日は、興正寺での交流会。予定通りお昼に到着して、西部(にしぶ)ご住職とお食事。その後、午後3時から和室の控え室で個別面談へ…との予定を、急遽変更。

バンテージから、会場でやるこのことで、次々と到着された面談希望の皆さんとは、衆人環視での面談となりました。実はこれ、2週間前に岡山の長泉寺で行われた形式と同じです。

これにより、来られた方はご自身の話が始まる前も終わってからはずっと会場にいて、ほかの方のバンテージとお話を聞いているのです。会場全体が、共感を持っているという不思議な空間になるのです。

私は長泉寺でこの形を見て、大変いいなと思っていたので、名古屋でもこうなった



ことで、今日はこのままこれで行ったらどうかと考えはじめました。
面談の終了後は、イベントとして6時からバンテージにスピーチをいただき、次にお弟子の小野さんたちと興正寺の若手僧侶の方々と対談「これからの仏教」の予定でした。

ところが、開場前から続々と来場者が入って来て、60席の予定が足りなくなり、別の施設からも椅子を次々と運んで、それでも通路まで人垣となって半分ほどが立ち見状態に。

過去、バンテージの名古屋講演を幾度も開催してきましたが、こんなことは初めてです。今回は、まさに異次元の講演会です！

150人くらいは入ったと思われる会場で、関係者と話し合っ、プログラムを急遽変更しました。午後の個別面談に引き続いて、メインイベントもバンテージにすべてお任せして、会場の皆さんが見守る中での面談にいたしました。来場者の皆さんが、バンテージを一目見たいと思っている、いったい、どんなお話をするのか、聞きたいと思っ、て来られている、と

関係者一同一致した認識でした。

今回、金龍寺の近藤様が面談内容を筆記してくださいましたので、一部ご紹介します。

【質問一】上人の言葉を戴きたい。佐々井「さおり」(質問者)はとてもいい名前。弘法大師と共に遍路することも、お釈迦様の説法を聞くことも、一体三宝である。一体三宝によって目、耳を養ってほしい。

【質問二】人生は生まれてくる前から100%決まっているのではないか？

佐々井「お釈迦様は死後のことも前世のことも説いていない。人

生は如何に生きるべきか、仲良く生きてい」と説く。私のこの顔は業の結晶であり、鏡で自分の顔を見るのも嫌だ。これは父母の業である。家が絶えて私はインドに来了。自分の業が苦悩になり、インドの龍樹菩薩に辿り着き、南天の鉄塔が出てきた。日本と決別してアンベードカルの遺志を継いで人間の道を蘇らせる道に進んだ。...

【質問五】貴重な命、精子三千万の一つ一つの卵子との合体で生まれた私であるが、怨みはどうすればいいのか。

佐々井「すべてが悪人であると親鸞は言う。煩惱の塊りが阿弥陀様を祈る。阿弥陀本願ほど易しい宗教はない。法然は一日一万遍を唱えた。善と悪の宗教あり。歎異抄は人生の敗北者が泣きながら読む。信仰の心を持つことである。

【質問八】私は30歳になるまで発達障害者であった。世話になった医師に福祉経営のサービスをしてきたが、その医師の運営が金目当てばかりになり、恐ろしくなった。

佐々井「人生を正しく生き続けられることはない。急におかしくなる人は多い。忠告はできるが、あえて師から離れたら、逆恨みをしない方がよい。師が何をやろうとしているのかしばらく様子を眺め、大恩人を捨てないことである。

【質問九】インドはこれから米中を凌ぐと

思う。仏教はヒンズー教に変わるのか。

佐々井「今の仏教は伸びる。インドの救世主としてアンベードカルが現れた。仏教は地下に埋められていたが、現在は一億五千万人になった。インドの人口は増える一方で、回教国になりつつある。日本も仏教は減るばかりで、仏教の教えに帰依するけれども、坊さんには帰依しない。アンベードカルは三寶帰依は仏法だけで、僧はしなかった。一切の戒律は酒で破れる。私は22の誓いを持っていて、悪口を言う人には耳を貸さない。昨日、高野山から下りてきたが、アンベードカル像があるのは高野山だけである。仏教の法輪がインド国旗に描かれている。憲法を制定してインドに仏教を弘めたアンベードカルをヒンズー教も認めている。

改宗式に日本人が30名参加して、坊さんになる。

現在、『戦う仏教徒』を書いている。

今はそういう時代である。



龍族会議に参加して

坂田龍晴

2023年7月1日、東京四ツ谷真成院にて佐々井秀麗上人に縁(えにし)を持つ人々が参集し「龍族会議」が開催されました。

「龍族」とはバンテージ(佐々井上人)から得度を受けた人たちのことです。

参集された方々の中には、バンテージに得度を受けた方、法名を授かった方、心の師と仰ぐ方、またこれから得度されたい方などがおられました。

富士の山にかかる雲を龍になぞらえると



ころからバンテージのお話が始まり、因みに、余談ですが我が家の掛け軸は富士越龍図(ふじこしりゅうず 葛飾北斎作)です。

「龍は人を惹きつけるので、私も龍族になりたいというが、龍種族のシンボルなので、訳のわからない人に与える訳にはいかない。今こうして龍族というものを以て南天会が私を支援してくれている。南天会が発行している『龍族』を一部でもいいので、買って読んでください。私の活動も出ています。そしてインドに来てください。来たら南天龍宮城だけでなく、遺跡も見えます。そういうつもりで行く人も多い。そういう訳で「龍」の法名を「授かりたい」「授けます」という縁については皆様方のご理解をいただけたらと存じます。

たつて、たつて、どうしても「龍」が欲しいというような情熱あふれる方は私の前で、その火と燃える情熱を見てお授けいたしております。そういうことです。そのおつもりで南天会に入ってください。」と、



得度されたい方々へのお言葉を締めくくられました。今年の大改宗祭(インドナグプールにて毎年、10月に開催)に行かれ、その火と燃える情熱をもって得度される方々を私も楽しみにしております。

会はその後に「龍族」が前座に招集され、バンテージからの「度牒」 得度の牒(ふだ) 認可証明するものを授かりました。これは全く予想しておらず、驚いておりましたが、その「度牒」には、

得度

坂田 俊一

法名 龍晴

右 授興畢

聖龍樹沙門秀嶺

とありました。

感極まりました。

思い起こせば、2010年夏、父が余命幾ばくも無い癌の宣告を受け、仕事にも生き詰まっていた頃、南天会事務局の小林三旅(龍命)氏の動画配信サイトでバンテージを知りました。「すごい人がインドにいる」と、その壮絶ともいえる生き様に感銘を受けたのです。

そして、故山際素男先生の「破天」を読了した頃に、「会いに行こう」と決心しました。

当時の仕事を辞めての渡航に父は「行つてこい」と背中を押してくれたのです。父はその一年後に他界しましたが、縁を結ば



せてもらったことに、今でも感謝の念が絶えません。

そして、ついに2010年秋の龍樹菩薩大寺落慶法要式でお会いすることができました。

初めて見るバンテージの獅子吼は荒法師を彷彿させるものがあり、その迫力に圧倒されたのを今でも憶えています。

一か月の滞在中、僧房とインドラ寺に寄宿させていただき、帰国前に法衣と法名の「龍晴」をいただきました。

あれから13年。来日され、地元岡山に來られる際には、母と家内の三人で駅でお出迎えし、貴重な時間を過ごさせてい

いただきました。特に、母は往年のスターに会うかのように楽しみにしており「お師匠さんは本当に菩薩様のような人。素晴らしき人に出会えてよかった」といつも言っていました。その母も2020年に亡くなりましたが、今回、度牒を授かったことをとても喜んでくれていると思います。

そして、地元での至福の時間はなんといつても古本屋の散策を一緒にすることでした。

歌謡曲、古書、映画のビデオを見て回り、特に映画「昔の任侠伝」が大好きで「それを見ると気持ち立ち上がってきて頑張れる」と仰っておられました。

日本から遙か離れたインドの地で民衆救済のために闘っておられるバンテージの活力に少しでもなればと進呈してまいりましたが、今でもその気持ちは変わっていません。

最後に、

「人生は出会った人で決まる」といいますが、今生でバンテージにお会いできたことへの喜びは言葉では形容できません。

抜苦（苦を抜き）悲をあらわし、与楽（楽を与え）慈をあらわす

皆様、我がバンテージと共に、菩薩道を歩んでまいりましょう。

ジャイビーム！（三唱）

坂田 龍晴拝

写真：長谷川晃一

佐々井秀嶺氏の精査における考察

医療法人きくらライフグループ代表

中田賢一郎

（私と佐々井秀嶺氏との出会い）

私は関東圏を中心に全国で40施設程の医療機関、介護事業所を経営しております。バンテージがナグプールで運営する医療施設に医療機器や薬剤などを寄付したいという意向を南天会及びバンテージにお伝えしたのが令和5年4月の事になります。そこで6月に来日されると聞き、来日された翌日の5月31日に四谷で初めてお目にかかりました。在印中からふらつくことが多く、また日本に来る直前に転倒して頭を打ったことによる痛みがあるとの事で、6月2日に私が運営する練馬さくら病院にて精査をすることとなりました。

（事前情報）

バンテージが2009年に来日されたときの写真集（山本宗補著）を拝見し、そこに載っていた胸部レントゲン写真から、著しい心不全とそれに伴う肺水腫がある事は分かっておりました。また、糖尿病をお持ちで、比較的強めの薬剤をお飲みになっていることも分かりました。服用していたのは糖尿病の薬2種類。カルシウムと

ビタミンDの薬2種類でした。普段は寄進されたものを主としてお食べになられますが、最近は梅のおかゆを好んでおられるとの事でした。また、飲み物としては甘酒を好まれると聞いておりました。

（精査）

病院では頭部CT、心電図、採血を行い、全身の診察は私が行いました。頭部について：転倒による障害、出血は見られませんでした。微小な拘束はあるものの正常範囲内でした。年齢相応十々の前頭葉を中心とした萎縮を認めました。前頭葉は（1）運動の遂行に関与する領域、（2）まわりのあらゆる情報から推理、思考し適切な行動を起こすことに関与する



領域、（3）思いを言葉にする領域を司ります。これらは、すべて一般人以上の機能があると思われます。私は認知症を主とした高齢者の精神疾患に明るいのですが、この1, 2, 3が衰えているように思えません。画像上明らかな萎縮はあるものの、十分すぎる脳機能を維持していると思われる。逆に言えば、これ以上萎縮が進むことは考えにくいので、当面知的レベルは十分維持できると考えられます。心臓について：2009年の胸部レントゲンによると重度のうっ血性心不全であったと考えられます。心不全とは、「心臓のポンプ機能の障害により、息切れやむくみが起こり、徐々に進行し、生命を縮める病気」と定義されており、診断されてから5年で50パーセントの方が亡くなります。画像から予測すると、4段階で3あたりと考えられ、この心臓や肺であれば、何かをきっかけに突然死も十分考えられるレベルです。実際統計では3割の方が一年以内に亡くなります。しかしながら、今回の胸部レントゲンでは心不全の既往があったとは思えない状態でした。以前は伸びてふやけていたような心臓が、かなりのグッドシェイプで、大きさも3分の2ほどに引き締まっていました。以前は肺の下部3分の1は血でびしょびしょな状態、いわゆる肺水腫の状態でしたが、今回は元気な人間と同じような空気に満ち

た肺になっていました。特に積極的な治療をされたとは聞いておらず、何故ここまでよくなったのかは分かりません。一つには食生活の変化による体重減少があるのかもしれない。心電図も全く正常。聴診でも異常な雑音は全く聴取されませんでした。糖尿病について、2種類の糖尿病薬を含んだ合剤を服用していました。診察時の採血結果は正常範囲の下限でした。おそらく低血糖になる事も多かったと予想されます。そこで、薬を半分にしてもらい、2週間後、再度京都で血糖測定を行いました。お薬を半分にしたにもかかわらず、空腹時血糖は正常範囲にとどまっていました。投薬を中止しても良かったのですが、インドでの血糖測定が困難な事からこのまま減量した処方を用いてもらう事になりました。以前よりあったふらつきは低血糖によるものだと考えられ、処方を半分にしてからは体調も良好でふらつきもなくなったと伺いました。骨についてとても太く骨密度も十分に保たれていました。何時間でも立ってお話をされ、歩行もされ、普段から刺激を与えられている事が良い結果を生んだのだと思われまます。

(その後)

今回、随行された龍光さんの補助的な仕事を勝手にさせていただきました。医師というのは病気を見つけるのが仕事で

あり、明らかな病気が見られない事に少し不満を感じており、何か病気を見つけられないものかと常に観察を続けておりました。それこそ、小便のためにトイレに立ったところを尾行し何秒で出るかなどもこっそりと観察させていただいたりもしました。しかし、明らかな病気を見付けることはできず、医師としては少し不満ではありますが、弟子としては安心しております。数日間は朝から夜まで同行させていただきました。バンテージは自分で自分を鞭打つようにパワーをコントロールされているようで、一度入った鞭の効果は夜まで続くようでした。これはまさに体力のある我々はマネするべきだと思われました。しかし高齢であるバンテージはその鞭入れの為か、講演の後はかなり疲れたりする様子も見られました。在日中は

龍光さんが休憩時間を極力作っておられ、オンとオフのバランスがとても取れていたように見受けられます。このオンとオフを周りの我々がうまくつけて差し上げることが重要に思えます。

(その他考察)

昨今の新型コロナウイルスの流行をバンテージも避けられなかったと聞きます。年齢や持病からすると重症化してもおかしくないのですが、重症化しなかったと伺いました。コロナ感染症には5-A-L-Aというアミノ酸が有効だという報告があり、甘酒はまさにこれが豊富に含まれております。また、普段から採られていたビタミンDには感染時の重症化の抑制に効果があるという事が明らかにされており、これらの処方が偶然プラスに働いた可能性はあります。今回の随行でのお話し、破天に見られるような今までの生き

られないほど体調を崩すことも多いと伺いました。やはり気候や衛生に関しては日本と比較にならない厳しいものだと予想されます。私自身がインドに行ったことがないため、年内にインドがどのようなところなのかを肌で感じてこうと考えています。

次回の来日に向けての指針 採血が一度しか行えなかった事、またその時にバンテージの病態を把握しきれなかった事から、検査項目がやや物足りないものになってしまいました。次回来日時はより詳細なバイオマーカーの測定をしたいと思っております。また、来日中に心エコーを予定しておりましたが、時間的な問題で行う事が出来ませんでした。次回来日時は予定をシェアしていただき、可能な限り検査をさせていただきたいと思っております。

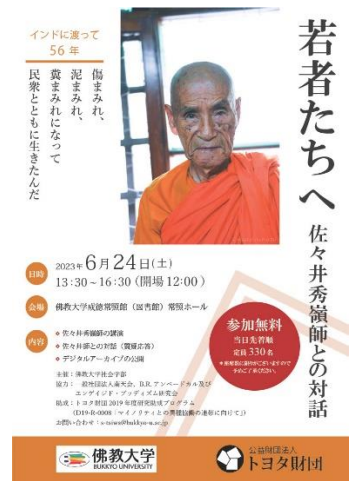
※この度、中田賢一郎医師の好意により佐々井上人の健康診断を実施することが出来ました。来日前には、体調面の不安を心配されていましたが、今回の精査によって、その実際のところを確認することが出来ました。中田さんには、京都や福島にも付き添っていただき、行程中健康管理をしていただきました。ありがとうございました。



ざまを伺うと、バンテージは相当地に幸運の持ち主だと思われまます。心肺停止から生き返ったこともあるとか…。まだまだバンテージにはやらねばならない事が残されており、そうそう簡単にこの世を去ることはできないのだろうと思いました。インドでは日本での体調が考え

佐々井秀嶺 デジタルアーカイブ

若者たちへ 佐々井秀嶺師との対話



6月24日、佛教大学で「若者たちへ
佐々井秀嶺師との対話」を開催いたしま
した。ご参加いただいたみなさま、ご協力
いただいたみなさま、本当にありがとうございました。
常照ホールからの「ジャイブーム」の声もインドに届いたことと思いま
す。

300名を超える方々にご参加いただき、6社の新聞社から記者の方が取材に来てくださいました。佐々井師との対話のパートでは参加者のみなさまから100以上の質問をご提出いただきました。ご協力ありがとうございました。

当日は佐々井師を導師とするパリー語の勤行、佐々井師による講話、研究者および参加者と佐々井師との対話に加え、佐々井秀嶺デジタルアーカイブの公開、手記や写真の展示を行いました。引き続き保存史料のデジタルアーカイブに取り組んでまいります。

（BRA研報告）



佐々井秀嶺デジタルアーカイブ
<https://sasaiarchives.com/>

佐々井秀嶺デジタルアーカイブ
Yas. Shōri Sasaki Digital Archives

手記、写真、映像などのデジタル資料が、種類、年代、場所などに分類され、文字起こし作業も進めています。さらに日記や発掘資料、裁判資料、各種印刷物等、貴重な資料を Web 上に保存して、佐々井秀嶺・インド仏教研究の基本資料を構築します。

アーカイブ資料より
手記「人類のどれい者とならん」

我は印度のどれい者となれと
誓いたり

されど我は今

世界人類

一切衆生のどれい者となることを

誓わん

夫れ法界は我なり

我
は

我自身に対して

眞実忠実なること

即ち法界に忠実なることなり

一切衆生は

我が友なり

我が兄弟なり

我が父母なり

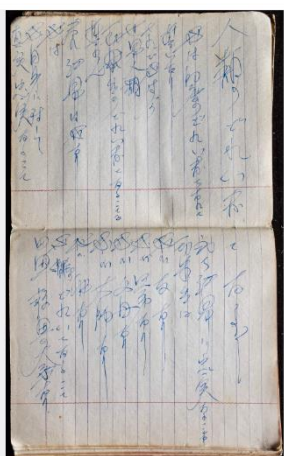
我が大師なり

我が佛なり

我一切のどれいとなること

四恩報恩の大義なり

（1973年9月5日）



インド旅行のご案内
「迅速やかに南天龍宮城へ行け！
インド・ナグプール大改宗記念式典
参列ツアー」

毎年ナグプール改宗広場（ディクシャ・ブーミ）で開催される改宗記念式典に参列する南天会ツアーです。

今年は10月24日がその正当日にあたり、佐々井上人もディクシャ・ブーミプレジデントとして大導師を勤められます。

龍族会議でお話がありましたが、この機会に得度を希望される方に得度式を行っていただきます。改宗広場では、人びとが仏教徒になる改宗式が行われる改宗テントがあり、そこで佐々井上人は連日改宗式を執り行っておられます。南天会ツアーもそこに参列し、得度希望者に特別に得度式（改宗式とは違います）をしていただけることになりました。

ツアーでは、佐々井上人の住坊インドラ寺やナグプール各所、マンセル・ラームテクの遺蹟訪問、デリー市内観光も行います。また希望者にはデリーから世界遺産タージ・マハルのあるアグラ、ジャイプールをめぐる追加ツアーも企画しています。ぜひこの機会に南天龍宮城へ行きましょう！

（旅行日程）

10月22日（日）午前9時成田集合

23日 早朝ナグプール着

24日 記念式典参列

25日 マンセル・ラームテク訪問

26日 デリー観光 夜帰国便

27日 朝成田着

※追加プラン

26日 デリー〜アグラ観光

27日 ジャイプール観光

28日 デリー観光 夜帰国便

29日 朝成田着

（旅行代金）

基本プラン 298,000円

追加プラン 378,000円

※それぞれ個室利用は追加料金

※年油サーチャージ・空港税等別途必要

※得度希望者は、申込時に南天会事務局

までお知らせください。

※南天会より位田龍樹師が同行します。

（お申込み）

同封の旅行案内・申込用紙にてお申し込みください。

プラスツーリスト株式会社

担当：石田 080-2507-0001

FAX:06-6300-7193

t-ishida@plus-tourist.co.jp

ブツダガヤ大菩提寺裁判報告

来日行脚からインドに帰国されて間もなく、ブツダガヤ大菩提寺裁判の審理再開の連絡があり、佐々井上人は7月28日の審理に出廷するためデリーに向かいました。

インド最高裁判所は、2019年1月のアヨーディヤー裁判判決の後、コロナ禍による閉鎖により、審理日程が何度も延期されていきました。佐々井上人の弁護士団もアヨーディヤー判決がヒンドゥー教寄りだったことから、ブツダガヤ裁判も慎重な対応が必要だという認識でした。しかし佐々井上人は、何度も審理再開の嘆願書を提出し、今回ようやく最高裁判所に出廷しての審理が行われました。

今回は、裁判再開の決定がなされた次回公判の日程調整が行われて終了したようです。今後判決がいつになるのか分かりませんが、佐々井上人は三大誓願の一つであるブツダガヤ大菩提寺返還に向けて、まい進する決意を表明されています。

インド最高裁 市民法廷書面告訴
2012年 訴訟番号380



写真：小林三旅



南天会会費・支援金(2023年4月1日～2023年7月31日) 2,858,161円

※事務局・南天会口座及び Syncable を通じて送金された支援金合計額です。
佐々井上人に直接渡されたお布施は含まれません。

【2023 年来日支援・寄付者ご芳名】

赤池泰弘 赤木有子 赤羽公生 浅野肇 葦木啓夏 伊神玉蓮 池田俊昭 池田裕司 池田里通子 石澤
実菜美 泉淑子 市川恒雄 市川史枝 射手貴幸 射手巳和 伊藤小由里 伊東薫雄 伊藤友人 伊藤直
樹 井上聡史 井上弘子 岩佐徹史 岩本憲宗 岩田朋子 上杉則和 内田純絵 内田稔 漆間宣隆
江口泰観 江角恵 榎木美樹 江幡誠 遠藤世津 遠藤暁炭 大泉貴司 大木大輔 大熊良樹 大崎敬子
太田誠行 小笠原大輔 岡本佳子 小川加奈枝 小川原志保 荻須眞教 織田隆深 甲斐三晴 柿澤禎恵
掛川弥生 笠間研成 梶原正臣 カタオカアツコ カタヤマサミ 勝野敦子 カツノマミ 角居康宏
加藤哲也 加藤泰弘・トク 叶井公子 金子勇 金子航太・暁穂 神藏澄 雁金千夏 川島栄作 康熙満
菅木智子 菊池かな 岸信一郎 北岡篤子 北澤忠雄 木村等 木山理恵 清利教宏 城戸佳織
クドウヒロキ 工藤真奈美 窪寺伸浩 倉田順子 黒川浄慧 黒澤雄太 小池一郎 小泉秀美 小泉健太郎
小泉連夫 小泉弘子 興正寺 西部法照 河野秀海 河野太通 小熊正恵 狐島法天 小西高司
小西高親 小林正尚 小南妙覚 小向宣通 古屋野伶勇 小山寿一 小山美津江 近藤えり子 近藤堯寛
近藤久修 西國寺 齊藤敦子 齋藤哲子 坂田龍晴 サクラタマキ 佐々井淑江 笹部一眞 佐藤秀仁
佐藤駿 佐藤茉莉奈 佐野湛要 穴戸末美 柴田淑 シバタユウキ 嶋崎実 志茂紀子 SHOWKO
正司昌子 下村栄美 白井昌子 真成院密門会 新城晋一郎 新城さやか 杉本留美子 鈴木亜凜
スズキヒロコ 須田早苗 全国大学同和教育研究協議会有志 添田隆昭 大堂立 退蔵院 高尾恵子
高木天慎 高遠典昭 高橋裕 滝沢彰 田口清紹 竹原路晴 竹本泰広 武山博子 多田真祥 立野英夫
立野悦子 田中國芳 田中修司 田中徳雲 田中トシノリ 田中よしこ 谷口雅志 玉川奈々福
茶木加奈子 長泉寺 長命密寺 土田一博 手塚龍天 手塚龍月 手塚天麻・圭代 寺尾純 テラオユウコ
寺島龍潮 寺島龍湖 天空恵 土居奈生子 遠山睦子 土岐信子 飛田尚彦 内藤了瑞 中川豊俊
長倉弘衣 中嶋真紀子 中瀬恵子 長瀬信泰 中田賢一郎 ナガノカオル 中原永昌 長嶺信夫 中村和子
中村亮一 成山昌夫 成田山新勝寺 西田光子 西村馨 西村和代 日本武徳院 沼田聖美 野口節子
野沢恵美子 野田豊 野中健太・美嶺 長谷部敬太 八田次郎 羽野芳康 (一財)日本国際財団
原清美 原真佐美 樋口美恵 平野文雄 平原正雄 平原美智子 蛭田正司 福瀬くに子 福田悦子
フクナガリュウイチ 藤田泰裕・和美 藤原博元 古屋由美子 細川孝二 堀越宏一 本田照代 前田卓幸
前田奈美 松井敏明 松井日出子 松浦義和 松岡真理 松田純子 松田龍児 三島史津子 水谷潤
溝口寛哉 水野さき・わいち 峯村和典 宮腰誠 宮崎智和 木村ひとみ 宮淵泰存 宮淵泰秀 宮本慶通
宮本龍勝 三好章 民部孝 武藤政和 村田雅之 村山睦美 森哲史 森川亮子 森下正志 森田将仁彦
八木園美 八木橋博 安井順子 柳澤徹 柳澤利文 山際輝男・京子 山本すみ子 山本宗補 山本典子
横島康裕 吉井浩文 吉木百合子 吉嶋敏生 吉田周平 吉村大樹 龍潭寺 蓮 蓮華院誕生寺
和田美也子 渡邊壽美江 渡辺典子 黄榮墩 翁純敏

BAIAEJapan Samik Gajbhiye Sviona Lumbini Meshram Wanjari Aniruddha
(五十音順 敬称略)

※上記は南天会に送金いただいた方と、佐々井上人に直接渡された方でお名前の分かる方を掲載して
おります。その他、世話人・賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

(宿泊提供) 真成院 長泉寺 福王寺 新宮由美 長命密寺 小池一郎 内船寺

(隨身者) 宮本龍勝 福持英助 小野龍光 高橋浄休 位田龍樹 小林三旅

あたたかいご支援ありがとうございます

◆南天会現況(令和5年7月31日現在)

正式会員数 267名

龍族発送者 482名

※贈呈者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

◆賛同人(50音順)

漆間宣隆(浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月(釣月庵庵主)

織田隆深(高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

小野重徳(仏国土の会会長)

黒澤雄太(剣士・日本武徳院師範)

小池一郎(株式会社マクシスエンジニアリング)

常務執行役員)

高山龍智(佐々井上人お弟子)

土屋信裕(顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰(臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存(日蓮宗妙光寺住職)

宮本光研(真言宗御室派元執行)

宮本龍勝(佐々井上人お弟子)

山本宗補(フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

南天会会費・支援金はこちらまで

【金融機関】ゆうちょ銀行

【加入者名】南天会

【口座番号】01380-0-90164

「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。

※他金融機関からの振込用口座番号

店名(イチサンキュウ)一三九店(139)

当座 0090164

会員種類と年会費

支援会員 10,000円(会費+支援金)/年

一般会員 5,000円/年

学生会員 2,000円/年(※大学生まで)

※会費納入済み年は、龍族送付用封筒の宛名ラベル右下に記載しています。

例:一般会員令和3年入金済→ 一般R3

(Syncable から入会・寄付)

オンラインで会費や支援金の決済ができる寄付プラットフォーム Syncable に団体登録しました。

インターネットで Syncable(シンカブル)を検索していただき、「団体を探す」→「南天会」で寄付ページを開けます。各キャンペーンも行っておりますので、ご参照ご紹介ください。

南天会ページ QR コード→



龍尾言

来日2日目の高尾山山本秀順師の墓前で、佐々井上人ははっきりと「インド仏教再興は完遂した」と宣言されました。三大誓願の一つが成し遂げられたとの言葉に、少なからず感動を覚えました。そのせいかどうか分かりませんが、今回の来日中、バンテージのにこやかな顔が印象的でした。もともとアーカイブにも残っている昔の映像や写真でもバンテージは笑顔が多いのです。アンバードカル博士は、その使命の重さからか笑顔の写真がほとんどありません。その遺志を継ぐバンテージは、アンバードカル博士の代わりに、博士の分まで笑っているのかも知れません。しかしまず一つの成就を私たちは見たのです。あと二つ、ブッダガヤ大菩提寺返還、南天鉄塔開見。いよいよです！バンテージはその最先頭を前進中！ ササイ アゲボロ!! (佐伯)

(南天会事務局)

〒179-0075

東京都練馬区高松 4-16-3-102

小林三旅(090-4538-2677)

佐伯隆快(090-5304-8955)

南天会ホームページ

www.nantenkai.org

メール nantenkai@gmail.com

南天会フェイスブック、ツイッター、YouTube
ご利用ください。